

生を祝う葬祭場

触覚的想像力を用いた“生”の誘発

石川 天

建築デザインコース

ヤン・シュパンクマイエルの触覚的想像力には生と死の枠組みがあり、その美と気味悪さに感銘した。鳥取砂丘で育た幼少期の砂の暖かさと、祖母の死で感じた体の冷たさ。葬祭場は死者に別を告げる悲しい場である。しかし、死者を介して人が生を祝福できる場になりうるはずだ。本葬祭場は、鳥取砂丘の歴史的な痕跡の場に建つ。常に流動しパラパラと消えていく砂丘は、死と生の溢れる風景だと考えた。死を弔いにここを訪れる人々は、雄大な砂丘と日本海の間広がる、本来あるはずのない場所や砂の暖かさに喚起され、自分は恵まれた稀有な存在だと発見し生の喜びに包まれるだろう。絶望が希望に変わる場所をコミュニティに提供できれば、死者は生者の中心に居る場となるだろう。個が独立している現代社会において、新たな希望を感じられるような新しい人と人の“あや”を見出す場所がつかれるのではないかと期待している。



意匠設計／イメージカラーージュ

多様な世帯構成のための集合住宅

鳥のように浮遊し、交流する

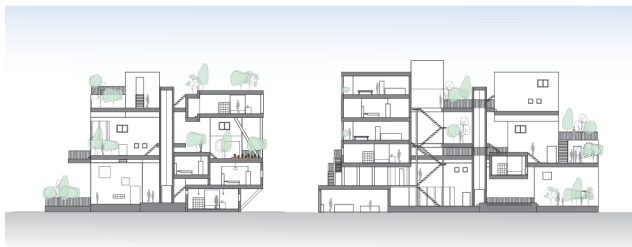
齋藤靖葉

建築デザインコース

単身世帯が増加する現代の日本では、社会的孤立のリスクが高まっている。多様な世帯構成の居住者が浮遊するように交流し、自然と他者との会話が生まれるような場所が欲しい。住戸を、内部と外部の環境を自由に變化させることができる建築と考へ、集合住宅を形成する。

大都市のタワーマンションも、巨大で立派な下駄箱住宅に過ぎない。家は人と人のふれあいの場である。

地方都市にあふれる、畑と様々な家がつくる広がり立体的に組み立て、田舎を都市に持ち込む。様々な大きさの住戸を入れることで、多様な世帯構成の住人がそこに集まる。それらの住戸と、畑や遊具がある共有部を綾をなすように配置することで、そこを住人が鳥が浮遊するように歩き、その中で、住人同士のコミュニティが形成されていくだろう。この集合住宅をきっかけに、内に閉じがちな現代人の生活を開放し、社会的孤立のリスクを払拭することを目指す。



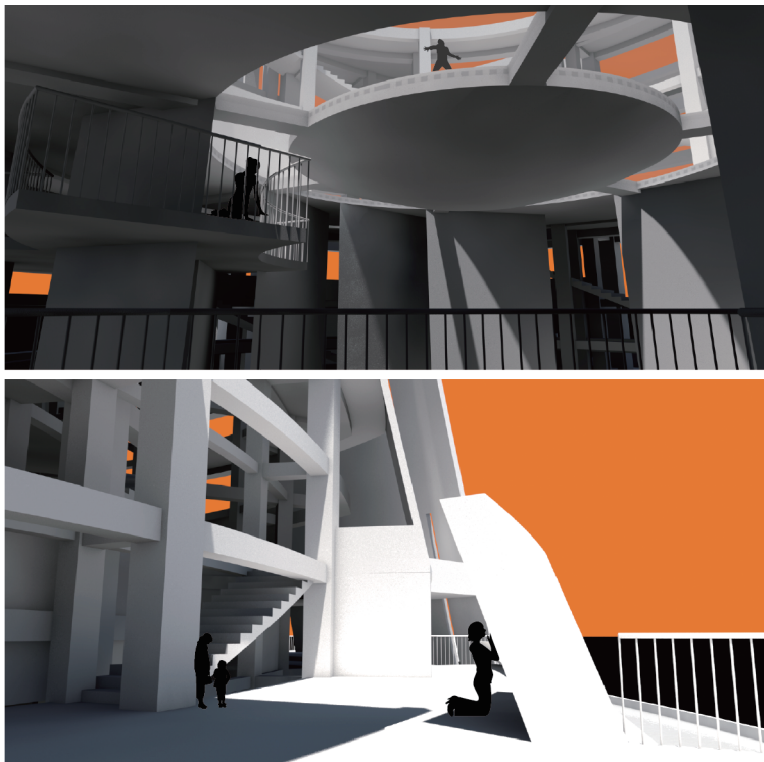
建築意匠／図面

現代人のための祈りの場

佐々木美玲

建築デザインコース

現代社会では人々が生き急いでおり、自己と向き合えるような場所・空間があまりない。具体的な用途を満たすためにできている場所、あるいはその場所で具体的な目的を達成することが存在意義であるような場所ばかりである。本来建築とは、人々がそこで「未来を想う」場所なのではないだろうか。そこで建築自体が持つ神聖な印象を与えるはたらきを用いることで、「人の純粋な居場所」を「折りの空間」と称して提案しようと考えた。計画敷地である富山駅前には、多くの人々が通行し路面電車の往来も盛んである。駅前という立地を生かし、駅利用客の来訪と、同時に建物に訪れる人による駅前広場の活性化を促す。利用者は年齢・信仰を問わず、それぞれの経験に基づいた様々な解釈の空間体験ができるような設計を目指した。宗教建築が持つ静けさ・非日常性を再現するため、境界性を持たせながらも人を遠ざけないような工夫を考え設計した。



意匠設計／図面、模型、3Dデータ

塀と穴

内外の境界が曖昧な暮らしの場

別所壱将

建築デザインコース

私にとって、都市はすこし息苦しい。意味に満たされていて、隙間がないのである。だから私は神社にたまに行く。鳥居をくぐると、そこには違う世界が広がっていて、息苦しさから解放されたように感じるのである。神社は都市にあいた「穴」だといえるだろう。周りの塀や木々、社殿、そして中にある私自身の身体も含めて、みんなで穴をつくっていると私は感じた。

そんなぼっかりとあいた穴のような場所を金屋町に設計する。金屋町の住人達が色々として都市の息苦しさから自分自身を解放することを目的とした、自由な活動ができる場所である。いろんな穴を自由に行き来できる暮らしの場をつくる。

ここに建つのは図書館、カフェ、カプセルホテル、サウナ、展望台、自動車整備場、バス停の7つの領域を穴としてつくる建築である。そこでは、人の活気が人垣をかこうように、人垣がかこう穴が都市の隙間となるだろう。



建築意匠／模型

地域と共に育む学舎

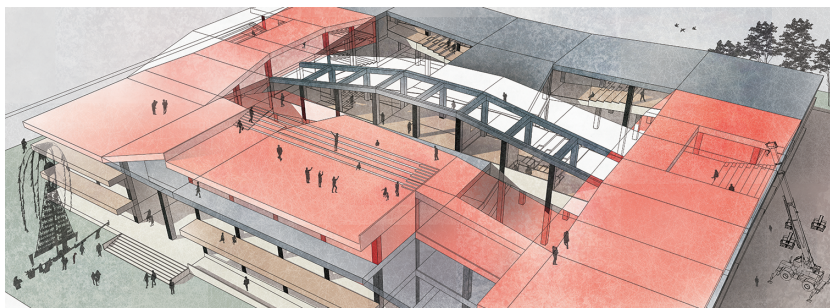
新築・改築・減築により段階的に変化する小中一貫校の提案

森野涼帆

建築デザインコース

現在、富山県魚津市は変化する教育需要の最中にある。小学校の統廃合計画が進み、12校存在していた小学校は4校に統合される。この魚津市を題材に、2023年から2053年までの30年間で段階的に変化する小中一貫校の設計を行う。新築・改築・減築の手法を用いることで拡張性を高め、人口動態の変化により変貌する教育需要に対応し、変化を続ける建築を提案する。

30年間のプロセスを設定し、必要・不要となる機能を段階的に挿入・削除していく。学校としての機能だけではなく、コミュニティセンターなど地域住民のための機能も追加していくことで、学校と地域が共に育む学舎となる。また、地域と学校を帯のように編み込んでいくプロセスこそが、新しいメタボリズムのあり方である。グラデーションのように移り変わる空間がプログラムの新陳代謝を可能にし、変化を繰り返す建築となる。



建築意匠／図面・ドローイング・模型

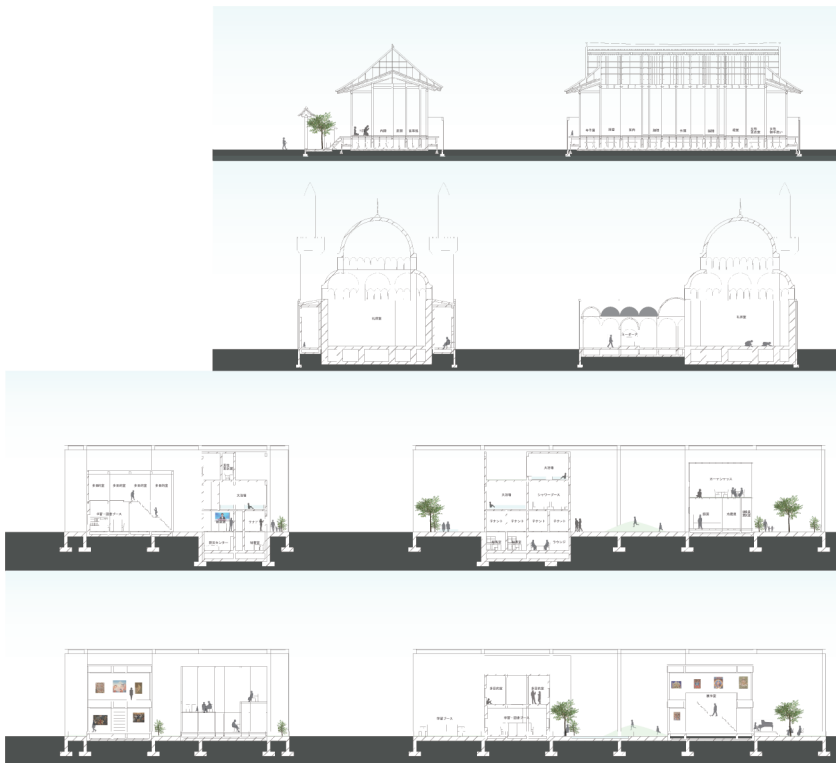
光から成る荘厳性のcommons

多宗教への相互理解を可能にする祈りの場

山田領花

建築デザインコース

現在、世界で最も信徒数の多い宗教はキリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教である。宗教の多様性は人類の豊かさを形成するが、反対に人々の間に亀裂を生じさせ紛争に発展した歴史もある。今後の世界平和を考えたとき、信仰するか否かに関わらず、多様な宗教の豊かさを知り、深い相互理解を確立できる日常的な場は重要である。そこで、それぞれの宗教に特別な意味を持つ光に焦点を当て、異なる宗教の文化を感じることができる日常的な祈りの場を提案する。半透明なスクリーンの上に屋根のみ見える様々な建築をつくる。それらの建築の中ではその宗教を体験でき、内側から宗教と光の関係を知ることによって理解を深めることができる。外部からは、内部の様々な光を予期できる。半分街に開いた建築を一つのランドスケープに修景し、それぞれの宗教の独自性を判別できると同時に、調和する街並みができるような、特別な雰囲気を実現する。



建築意匠／図面

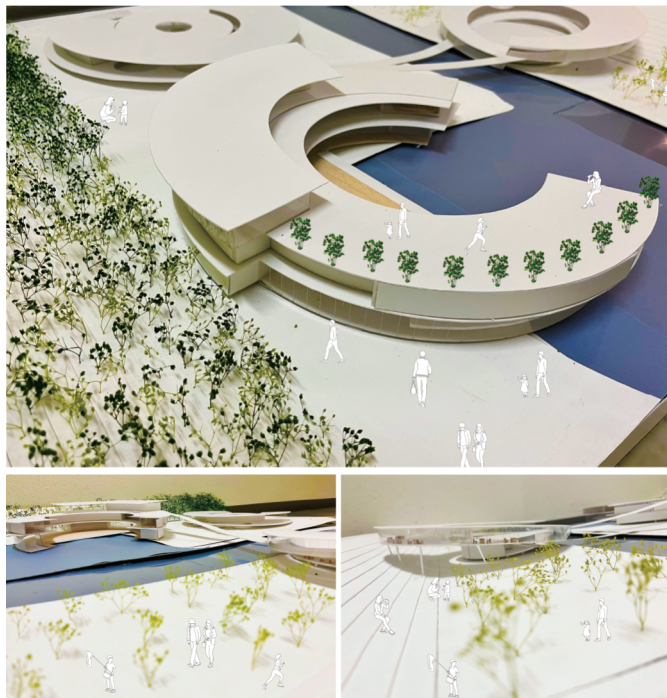
親水風景で創出する新たな入浴施設

遊水地を中間領域とするからまりしろ建築

和田真侑

建築デザインコース

昨今、地球温暖化が頻繁に指摘され急激な降水量の増加が身近な問題になっている。そこで、想定外の自然災害で学んだことをもとに、身の回りの住環境を考え直す計画を試みる。神通川流域に遊水地を計画することで、長期的な視点で「地域の在り方」「自然との関係」を考え直す。実際に行われている「エコ氾濫」をもとに、計画地に川の水を流すことで、生態系を豊かにし、地球エコロジーに触れる場を身近に作り出す。既に敷地にあるスケボー広場やスポーツ広場に、新たに湿地帯、生態系の丘、遊泳ゾーンを追加させることで、地域の人たちが楽しめるランドスケープを提案する。また、温泉施設と学習館、カフェを媒介として、地域住民が集まれる「居場所」を創出し、多世代にわたって、水・川・平野について考える場所を提案する。



建築意匠／模型

富山駅前未来風景を紡ぐ

リサーチバイデザイン『渋谷型にぎわいモデル』

浜谷詠斗

建築デザインコース

戦前より富山駅前には市民の賑わいの中心であったが、戦後のモータリゼーションや核家族化を伴った都市化の影響で郊外が脚光を浴び駅前は通過することの方が多くなった。しかし誘導区域としての可能性はある。今は埋め立てられた神通川の濁流のダイナミズムを想像力を持って解釈し、見えづらくなった『富山らしさ』を復活する。昨今の富山県の目覚ましいスポーツにおける業績をこのダイナミズムに重ね、スポーツ技術や知識を伝導する『スポーツの図書館』という未だない出会いの場を計画する。鉄道線の合流地点である富山駅前にこの施設を組み込むことで、県内スポーツのネットワーク拠点となり、トレーニングやスクールで街を訪れるリピーターを育てる。この戦略が最も顕著な渋谷駅を鍵とし分析し、得られた『渋谷型にぎわいモデル』を動線やプログラムに反映する。リピーターと多くの市民によりこの街と建築が多様な出会いの場となるだろう。



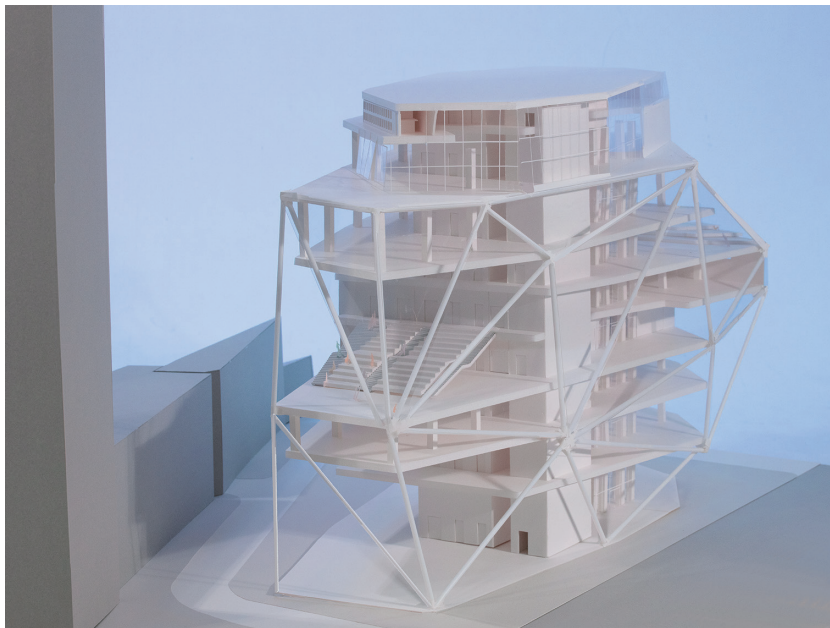
建築意匠／建築図面・建築模型

生命の『動的平衡』に基づく建築のパラダイムシフトを目指して

増川夕真

建築デザインコース

生命とは常に「壊してつくる」『動的平衡』の活性状態である。生命は、全体の秩序をかりうじて保ち、持続的な発展を達成してきた。私は、文化の持続的な繁栄には建築がこの『動的平衡』状態に倣った建築空間を具現化することが鍵になると考える。私はこの建築空間の構築にあたり、『動的平衡』をヒトと空間の「相対的な関係における絶え間ない分解と再構築の流れ」と翻訳しインキュベーション施設を設計した。本計画は『全ての人に開いた場』をビギナー、投資家、インフルエンサー、一般市民、管理組織からなる「5種のアクターによる創発的行為体系」で「そこで逐次行われる行為が形式を変える」場をプログラムする。この建築空間は、決定論ではなく浸透論に基づいた計画で、社会状況の変化にも柔軟に対応できる。日本を拓く人を育てる新しい機関、それは明治時代の開港から培った「進取の気性」遺伝子を持つ神戸にこそ先陣を切って実現できるシフトである。



建築意匠／図面、建築模型

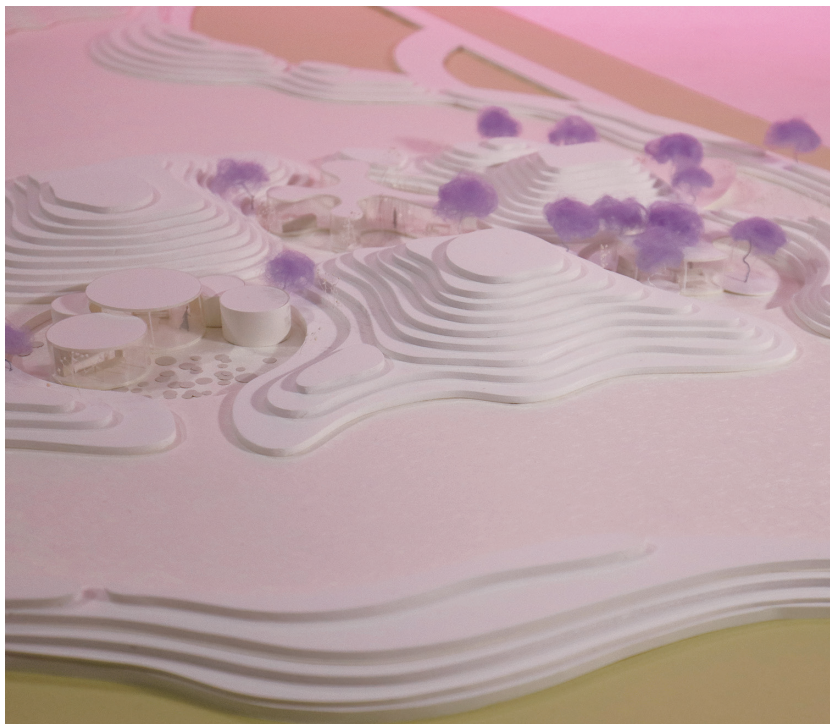
未来を歌詠む場「円山」

大伴家持の布勢の水海を表象する

三宅日向子

建築デザインコース

「布勢の水海」は万葉の歌人である大伴家持が好んで歌を詠んだ場所である。かつて「布勢の水海」は氷見の南部平野に広がっていた。私は、布勢の円山を含む自然風景が時を超えて诗情に溢れる豊かな場所として蘇ることを切に願い、現代の歌詠みの場を設計した。建築意匠には風景を再発見し、家持の見た布勢の歴史的価値にかたちを与え、共通資産として育み、未来をつくる価値とする力がある。そこで、現代の歌詠みを広義の意味で捉えたアーティストインレジデンスを提案し、文人墨客のレジデンスタイプを研究した。家持は近景、中景、遠景を巧みに用いて水海の実景に、奈良の都を想う心を重ねた。土を盛り、その上に水域を乗せ、さらにやどの場所をつくることで家持が見たであろう近景をつくり出し、時を越えた風景の創出を試みた。私にとっての建築芸術とは、地域と世界、偉人と庸人が邂逅し、現在と過去、未来をつなぐ場をつくり出すことである。



建築意匠／縮尺模型

公共空間と地域再生

松本市城下町水辺のリノベーション

伊藤源

建築デザインコース

近年、地域／地方再生の手法・アプローチとして公共空間利活用の動きが活発になってきている。しかし、一般的に行政管理の空間は民間利用までのハードルが高く、中でも水辺（河川・港湾）に関する法律や規制は複雑であり、水辺の開放は活発ではない。

本設計では、長野県松本市の城下町を流れる女鳥羽川河川敷を対象敷地とし、城下町の文脈を継承した空間を提案することにより、水辺に関する種々の規制緩和、地域再生を目指した。

護岸・堤防を変形させ河川方向に開放し、上部には柱と屋根だけの空間をかけ、空間内の業態を仮設店舗とすることで、店舗形態の柔軟性、水害時の迅速な撤退を可能とし、若手の芸術作家やアーティストなど様々な人に開かれた、まちの活性につながる水辺を設計した。



都市建築デザイン／模型／h410×w1682×d595mm

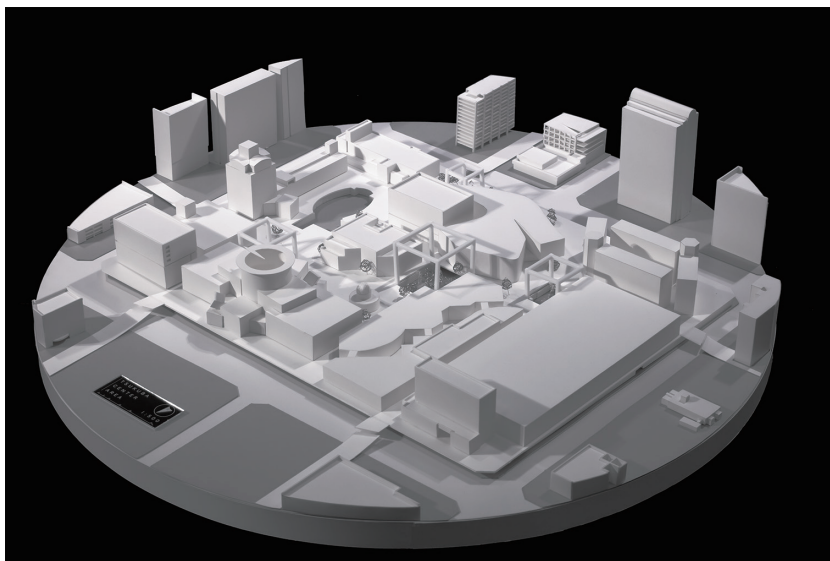
つくばセンター地区の未来

磯崎新の「多目的という無目的」を鍵概念として

荒井敢太

建築デザインコース

私は、故郷つくば市を憂う。つくば市は戦後最大の計画都市として生まれた。つくばセンタービルを作り上げた建築家：磯崎新が、つくば市計画の「多目的」という「無目的」という限界を指摘したことを、私は市と磯崎の2019年の往復書簡に見出した。この思想、法律や理論、オランダの都市計画手法を駆使し未来のつくば都市ビジョンを描いた。磯崎は「王の不在」「7つの性格の欠落」を指摘し、つくばの都市構造に対する批判を続けた。私は、建設から40年という時の流れを踏まえて、空洞化という現在の都市問題を、当時からの都市構造の問題を結びつけて再構築する必要があると考えた。つくば市は官が土地を管理する稀な都市である。巨大な力が蠢く都市を代謝的に成長可能な街として描くことで未来を考えると、私は磯崎新を継承することこそに可能性をみた。磯崎の建築で型取った7つの性格により、継続性のある都市ビジョンをメッセージする。



都市計画／図面・建築模型／h250×w1020×d1020mm

未完が促すまちの新陳代謝

魚津中央通り商店街の防火建築帯の増減築に着目して

伊藤野々香

建築デザインコース

富山県魚津市の「魚津中央通り商店街」は上階への増築が可能な造りになっている防火建築帯である。後方や上部に増改築、アーケード撤去などがされ、時代の流れによって商店街の景観が変化し続けている。このような増殖・展開する建築思想を持つ「メタボリズム」を軸に、副論文では各時代の空間とその利用の変容を分析して増減築のメカニズムを明らかにした。それを基に、未完という手法を用いて、新陳代謝を促す建築と仕組みを提案した。

コンセプトは「“建物”と“知”が『新陳代謝』する商店街」。商店街での会話や振る舞いを通して知識が蓄積されることで、新たな学びの機会、すなわち商店街が年齢を問わない「まちの学校」となる。また、未完＝“余白”があると捉え、新たに動線をつくることと、木フレームとシェードの導入により新陳代謝の促進を図った。社会等の変化に対応しながら地域性と持続性がある柔軟な建築提案を試みた。



都市・建築デザイン-地域再生計画／縮尺模型

家と食堂

桔木を用いて現代的な「あや」を架構する

中島晃一

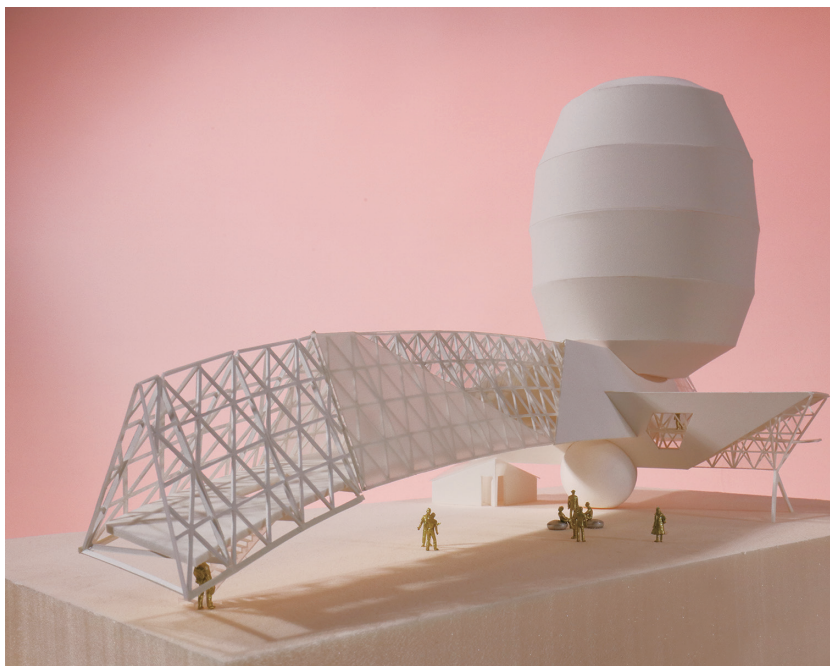
芸術文化科学研究科

桔木構法は、禪院方丈はじめとする日本建築の大きな軒を支えており、日本の武家や僧侶の日常生活の場所をより開放的な場所として実現した構法である。

本計画では、その伝統的な桔木構法を現代的な建築空間を架構する方法へと展開するため、シュルレアリスムの「デバイズマン (dépaysement)」という既存現実の概念からの脱却を行う手法を用いることを試みた。

ここで施主として想定したのは、食堂を共同経営するなど、住宅と住み手の関係を考え直すことで、新しい都市居住を目指す若い4家族である。

この家では、キッチンと家族の食卓を食堂に変換し、調理の役割を担っていた家族がその役割から自由になり、この家で暮らす家族の一人ひとりが適度な社会性の中で自由な個人としての暮らしとふるまいを獲得する。



建築意匠／図面、模型

現代の踊りの為の劇場建築

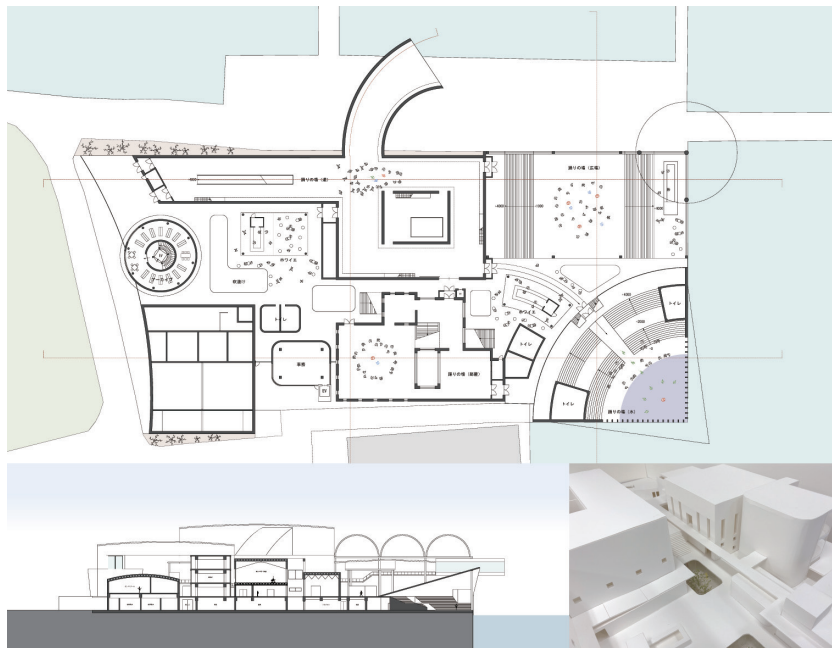
「みるみせる」の空間関係と街の要素を用いて

田中真琴

建築デザインコース

現代の踊りは、自由な表現を追求し、多様な変化を見せているが、表現の場所である舞台は、古典の踊りからのプロセニウム形式の劇場を使用し続けている。近年ダンサーは、街を舞台にしたり、カメラのダイナミックな視点を使って新しい表現に取り組んでいる。現代の踊りにおける観客とダンサーとの関係は、それぞれの領域が入り混じり、様々な視点からの鑑賞により、初めてその価値を満喫することができると思う。

本計画は、「踊りを立体的かつ、流れるように鑑賞できる新劇場」を求め、「みるみせる」の空間関係を建築的に再構成する事で、現代の踊りにふさわしい新たな劇場建築を設計した。



建築意匠／建築模型・図面

旧鑄造所の「孵卵器」

中林真紀

建築デザインコース

高岡鑄物発祥の地である金屋町は時代の変化に応じて幾つもの鑄造所を閉鎖した。本プロジェクトはこの旧鑄造所を建築家、芸術家の卵や芸文生が自立するまでの作業場としてリノベーションする案である。

既存の構造を基本としてガラスなどの現代の素材で新旧融合した構造の24時間のシェアアトリエと共に学生のシェアハウスシェアキッチン、コーヒースタンドを設置し、新しい町のシンボルになるような場所にする。このことで制作の様子をオープンに見せ、それが町への繋がりとなっていく。



建築意匠／建築模型、図面

街中の終後三景

酒井香奈

建築デザインコース

死の気配は街から姿を消した。近年墓地の建設にあたって、近隣施設や近隣住民から多くの反対意見や反対運動が行われている。そのため、墓地は市民の生活から隔絶されていった。今後、日常生活の中の一部を進んで墓地の中で過ごすような、そんな生活が営まれていくことはできないだろうか。そこで生きている人間にとって新しい価値を持った墓地を提案する。圧倒的かつ威圧的な建築空間の力を利用して、用い「死」の存在と墓地とは全くの無縁である「生」の両方を同じ場に内包する“空間葬”を用いる。空間葬の場である「覚」、「想」、「受」の三つの空間によって人々と街と死の気配が上手く共存していく。



建築意匠／縮尺模型

米製品エコロジーの園

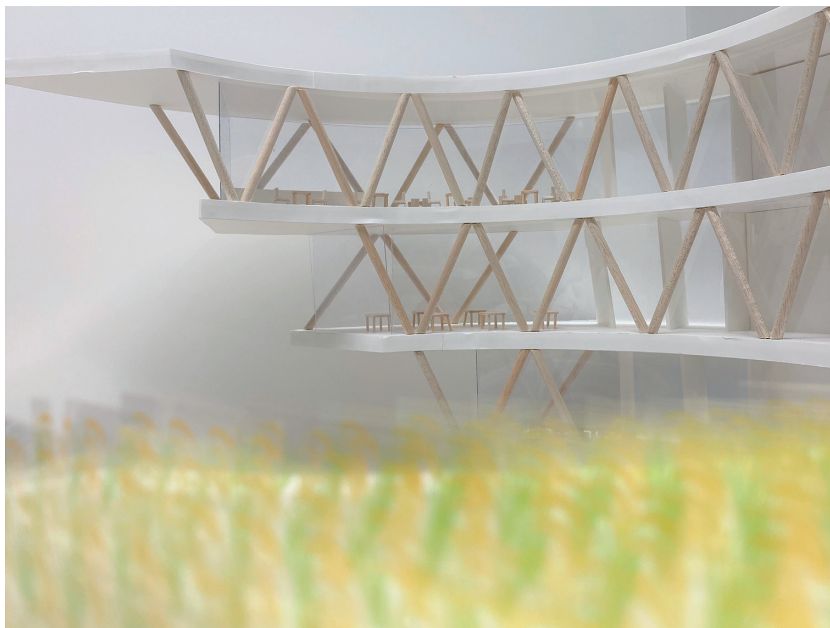
番場美槻

建築デザインコース

富山市は稲作が盛んな地域であるが、近年の都市化の影響で美しい田圃の広がりを感じる機会が減少した。未来の富山の姿を稲作を文化に高める建築で表現したい。稲が育ち、米・酒・菓子などの製品になるまでの工程を共同体験でき、嗜む場所を街中につくる。

1つの円ではなく、2つのから成り、大きな円には外から職人が作業をしている様子が見られるように、小さい円には施設内の人が田圃を眺められるように機能を配置した。

また、2つの円の中心を少しずらす事で、田圃の広がりに変化をつけ、田圃に包まれるような体験ができるようにした。



建築意匠／縮尺模型／h600×w2000×d1300mm

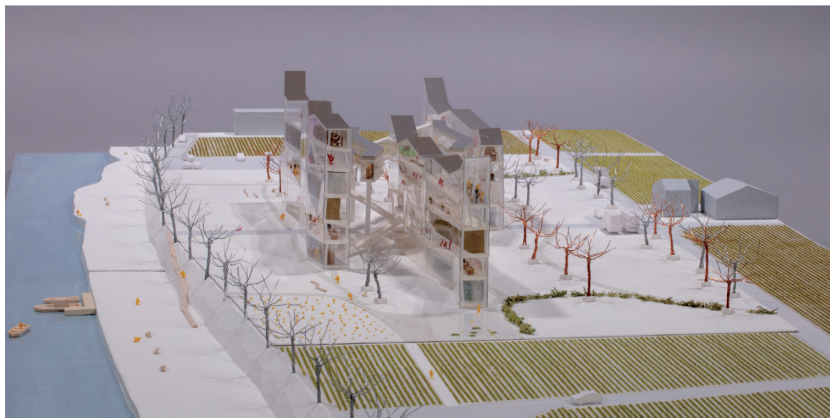
環流酒造

SDGs手法開拓への挑戦

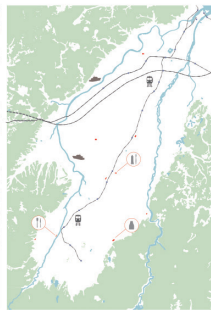
福井美瑛

芸術文化学研究科

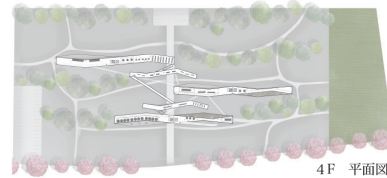
本計画では、建築主導で地方都市を活性化し持続性を高める方法を研究した。フランスのストラズブールの都市計画：PLUに学び、砺波平野の耕作放棄地を横断的な管理で再活用する。瀬戸内の離島のネットワークにアートを表示することで、地域を活性化した瀬戸内国際芸術祭を研究し、文化としての「日本酒づくり」を軸とした、新たな「酒蔵」を砺波平野の一角に提案する。この酒蔵は、砺波平野を基盤とし、農・林・畜産業の循環エネルギーの核となる。奔流のエネルギーを体現した透明な建築は、酒文化を発展させた小矢部川に沿うよう建ち、水・酒造り・来場者の流れを取り込み田園風景や酒文化を映し出す。



ストラズブール 図書館ネットワーク



砺波平野 酒蔵ネットワーク



建築意匠／模型・図面

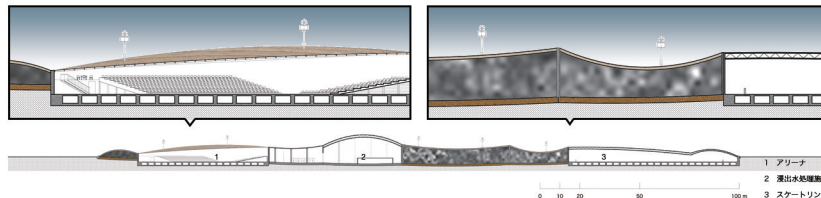
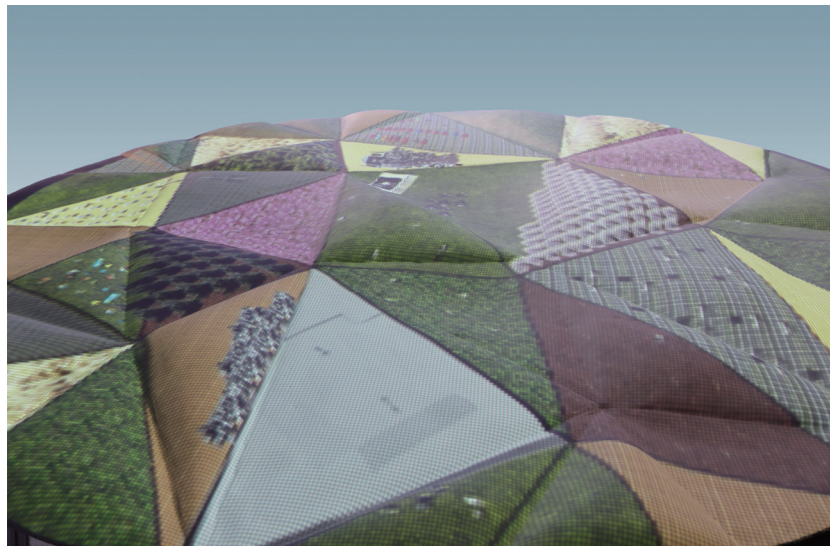
双曲面公園

SDGs手法開拓への挑戦

森田哲平

芸術文化学研究科

本計画は、SDGs技術のリーダーとなる都市公園構想である。実現可能な場所として郊外の大型商業施設近傍、中心街の公共施設建て替え予定地などを挙げる。多様な余暇の場を、同時多発的に可能にする新しい幾何学パターンを追求した。現代のハイプレイン多面体から着想した三角形のパターンを用いて、各部分に異なる舗装や植生を配置し、様々なひと・アクティビティ・ものが出会う場をプログラムする。一般ゴミの焼却灰等を造成のための資材として利用して変化に富んだ人工の地形をつくりだし、各所にスポーツ施設などの公共施設を組み込む。これは現代の過剰なゴミを福祉の実現に転換する方策であり、そうすることで、より持続的な方法で豊かな市民生活を実現する。



建築意匠／模型・図面